
はんたあ

生クリーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はんたあ

【Nコード】

N1402B

【作者名】

生クリーム

【あらすじ】

この世の中には、様々な趣味がある。良い趣味も悪趣味も……。そして僕と、クラスメートの凜の趣味とは――

序章

「ねえ、今日は暇？」

声と共に、僕の机に白い手が置かれる。

HRが終わって、徐々に人口密度が低くなりつつある教室。

教科書類を無造作に机の中に放り込んでいた僕に、桜庭凜が話しかけた。

「何？」

「だから、今日は暇かって聞いたの」

凜の肩にかかっていた髪が一房、はらりと落ちる。僕はそれを目で追った。

じゃあね。またね。最後の女子達が、喋りながら出て行く。その声と足音はだんだん遠ざかっていき、21Cの教室には、僕と凜だけが取り残された。窓から見えるグラウンドでは、練習着に着替えた生徒達が、部活動の準備を始めている。

「ああ、そう言えば今日は火曜だっけ」

そうだ。すっかり忘れていた。今日はアノ日だ。

「うん。今日は晴れているし、丁度いいんじゃないかな」

彼女は頷いた。僕は立ち上がりながら言う。

「分かった。じゃあ十時にいつもの場所で」

僕は随分と軽くなったりユックを背負った。あんなに重いものは持ち運びたくない。そして足早に教室を出る。凜と一緒にいる所を見られるのは勘弁だ。

「遅れないでね」

殆ど教室を出かかっていた僕の背中に、凜が言った。

「……前回遅れたのはお前だよな」

教室を出る前に、僕は一言言っておいた。凜も何か言い返したようだが、聞き取れなかった。

人間の趣味は、実に多種多様だ。それはスポーツだったり、映画鑑賞だったり、好きな物の収集など。

そして中には、犯罪まがいの趣味まである。僕の知り合いにも、公園で遊ぶ幼児を観察するのが趣味という奴がいた。

しかし僕には、他人をとやかく言う資格なんてない。僕の趣味だって、決して褒められるものではないからだ。

それは凜にも当てはまる。

「遅い」

そつと呟いてみる。

約束の十時。待ち合わせ場所に凜の姿はまだない。ちなみにここは、桜庭家から約二十メートル程のコンビニ駐車場。（僕はいつも現地集合にしようと言っているが、凜いわく『女の子が夜一人で出歩くのは物騒』とのこと）

暇つぶしに凜が来るまで、コンビニに入ることにした。

コンビニのドアを開けると、涼しい空気が気持ちいい。僕は近くの書籍コーナーで雑誌を手取る。今週号だ。

しばらく読んでいると、凜が来た。

「ご、ごめんね。えーと……父さんがお風呂に入ってて、えーと……私、なかなか入れなかったの」

凜は黒色の服を着ていた。ちなみに僕は学校の制服。

「おまえさ、親父さんの後に風呂に入るわけ？今時の女子高生としては、かなり珍しいな」

「あつ……。う、うん。そうだよ」

少しからかってみる。十分遅れる方が悪いのだ。

「嘘付け。お前んちの前通ったとき、テレビの音が聞こえた。どうせゲームでもしてたんだろ」

「……………」

凜は押し黙る。どうやら凶星のようだ。

「そ、それは置いといて、早く行こう。時間も無いし。——今日は二丁目だよね」

「ああ。誰かさんが遅れたからね。ゲームをしていて」

「もう、まだ言う」

こうして黒装束の僕と凜は、夜の街に溶け込んでいく。僕達はいれから——ゴミを漁るのだ。

第一章：真夜中の神社にて・上

火曜日夜十二十分。現在の時刻だ。

僕達は、住宅街を歩いていて。さすがに出歩いている人もいない。様々な家を通り過ぎて行く。黄色い光が漏れている。中にはどんな家族がいるのだろう。

「ねえ」

隣を歩く凜が、不意に声をかけてきた。いるはずのない他人を警戒してか、音量が小さく少し聞き取りづらい。

「何？」

「帰りに図書館に寄って調べただけだね、こっちに神社があるでしょ。二丁目までは、神社を抜けた方が早いんだけど、どうする？」
「マメな奴だ。その情報はありがたい。心の中で、彼女に少し感謝した。」

「どうするって、そっちが近いんなら、通ればいいじゃん」

すると彼女は、思いつきり嫌そうな顔をした。

「えー、神社だよ。夜中だよ。何が起こるか分からないんだよ」
「要するに怖いらしい。」

「アホかコイツは。ならわざわざ言わなければ良いのに、と突っ込む。」

雉も鳴かねばなんとやらだ。

「怖いんだろ、桜庭」

僕は、からかい混じりに言ってみた。すると凜は、声のトーンを上げながら、ムキになって反論してきた。

「こ、怖くなんか無いよ。ただその……ほら、変質者とか。神社ってよくいるらしいよ」

「はいはい、そんな事実はありません。ほら、行くぞ」

「あ……待つてよ。お願い、いつもの道で行こ？不審者がいたらど

うするの」

「俺がいるだろ。何とかしてやるから。——神社ってこつちだよな」
僕は凜をなだめすかして、ようやく神社へ向かう事に成功した。
彼女は最後にこう言った。

「もう、どうなっても知らないよ」

後に僕は、凜の言う事も聞いておけば良かったと、後悔する事になる。

「ねえ、どう？何か見つかった？」

あれから僕達は、夜の神社を通り抜けて、ここ——二丁目のとあるゴミ収集所までやって来た。明日が不燃物の収集日なので、それなりの数のゴミ袋が置いてある。

ちなみに例の神社では、凜のヤツが帰ろう帰ろうとうるさかったが、ここではその事は割愛しておく。

「うーん、こんな所。今日はロクな物が無い」

僕はそう言って手の中にある、先程まではゴミだった物を差し出した。

壊れた懐中時計（これ位修理できる）、ネジとボルト数個（何かの役には立つだろう）、汚らしいホース（元持ち主は洗い方を知らなかったに違いない）。これが今夜の収穫だ。

「お前は？」

僕が尋ねると、凜も、

「私も今日はあまり……」

と言っ、手のひらを差し出す。

途中で折れてしまっている消しゴム（それ位買えよ！）、水色の小さなガラスビン（それで何するんだ！）、ヘアピン数個（使うつもりか?!）。

……他人の事って分からない。取りあえず言いたい事は沢山あったが、毎度のようにそう締めた。

「……帰るか」

「……そうだね」

「こんな日もあるさ……」

「だよね……」

互いに今日は厄日らしい。

満足は出来なかったけど、

僕達はゴミ収集所を後した。

第二章：真夜中の神社にて・下

「えっ、またここ通るの？」

神社の下にて。暗闇の中、電灯に照らされてぽっかりと浮かび上がる薄汚い朱色の鳥居と、その向こうに広がる石段。それらを前に、凧はとても嫌そうに言った。

「今何時だと思ってるんだ。なるべく早く帰らないと、親が心配するだろ」

そう言つて僕は、長い長い階段を見上げる。確かに何か神聖で、それなのに不気味なものを感じる。これが神社という空間なのだ。

しばらく二人共無言だったが、遂に僕は決心した。

「じゃ、桜庭は一人で帰れよ。俺はこっちから帰る」

そう言つて階段に足を踏み出す。これは効果があつたらしく、凧も慌てて付いてきた。

「ちょ、ちよつと待つてよ。私も行く。行くから！」

彼女が隣に並んだのを確認して、長い階段を登る。こうして僕達は、再び神社の領域に足を踏み入れた。

——カーン——

長い石段もやつと登りきり、薄暗い雑木林の小道を歩いている時。その音は微かに聞こえた。

「ね、ねえ。何か聞こえない？カーンて音……」

凧が僕の服を掴む手に、ギュツと力を込める。ぴつたりと寄り添う彼女のせいで、少し歩きにくい。

僕はとつさに『う』から始まる呪いの名前が思い浮かんだ。しかし怖がる凧の手前、笑い飛ばす事にした。何と言つても強引に連れ来たのは僕なのだ。

「気のせいだろ。お前さ、怖がりすぎだっつーの」

「そ、そうかなあ」

勿論気のせいなどでは無い。あの不気味な音は、僕にもはっきりと聞こえた。

「グズグズしてないでさっさと帰るぞ。明日も学校なんだ……」

——カーン——

またあの音が聞こえた。しかも、先程よりもはっきりと。

「や、やっぱり聞こえるよ！釘が何かを叩いている音！」

凜はかなり動揺しているようだった。このまま泣き喚かれては色々面倒なので、取り敢えず落ち着かせる事にした。

「落ち着け。どこかに、俺達以外の誰かがいるのは認める。だから早く逃げるぞ」

——カーン……カーン——

僕は凜を無理やり立たせ、その腕を掴んで走り出す。なかなか骨の折れる作業だった。

——カーン……カーン——

その間も、釘を打つ音は絶え間なく響く。

そして、

「……！……こつちだ！」

僕はとつさに、側の杉の陰に隠れる。凜を引きずり込んだ時、彼女は転んでしまったが、この際どうでもいい。

あるうことか僕は、釘を打つ人物の側に来てしまった。

一瞬だけ見えた白装束。暗闇の中にあつて、その白色は浮かび上がっているようだった。

僕は、釘音が近付いている事に気付かなかった。夜の雑木林が、僕の空間把握力を奪ってしまったのだ。

「おいおい、気が早いな。彼——いや、彼女か。まだ十一時過ぎなのに、丑の刻参りかよ」

絶対絶命の時だというのに、僕の頭は冷静だった。半ばヤケクソ

なのかもしれない。言葉が次々と出てきた。

「てゆーか、頭に蠟燭を巻いてるし。あれって本当だったんだ」

僕は凜を元氣付けるために、軽口をたたいてみた。しかし効果は無かったようだ。彼女は俯いていた。どうやら泣いているようだ。これだから怖がりって奴は。

「ここでもうしても、仕方無い。俺が合図したら、すぐ走るんだ。出来るよな？」

その言葉に、凜が頷く。

僕は藁人形を釘で打つ女を見つめた。あの女が木槌を叩いた瞬間、カーンという音に紛れて一気に走るつもりだ。

女が木槌を振り上げた。僕は凜に目で合図しようと振り返った瞬間、

——バキッ——

なんてベタな。そして愚かな。

僕は足元にあった枝を踏んで折ってしまった。その音は、思ったよりも響き渡る。

「ヤベっ……！」

隣で凜が息を飲んだのが分かった。そして——

女が振り返った。

全てはスローモーションのように、ゆっくりはつきりと僕の目に映る。僕は、金縛りに遭ったかのように動けなかった。

僕は女と目が合った。その顔は想像通り乱れ、血走っていて、鬼みたいな表情——ではなかった。どこにでもいる、僕の近所にいてもおかしくない、ただのおばさんだった。

僕達は、しばらく見つめ合った。しかし、一瞬のようにも思える。相手の表情は、困惑しているようにも見える。

僕は凜の

「ねえ、早く逃げようよ！」

という声で我に返った。

「了解。早く逃げるぞ」

僕は凜の腕を取って、再び走り出す。長い石段も、短く感じた。街灯の下まで来た時、やっと安心出来た。女は追い掛けて来なかった。僕の読んだ本だと、追い掛けられた主人公はトイレへ逃げ込んで、そこで捕まった。やはり、本と現実の違い。

「ハア、ハア……。あー怖かった」

凜はあれだけ怖がっていたクセに、もうケロツとしている。

「知らなかった。お前、怖がりだったんだな」

「あ……。お願い、他の人には言わないでね」

「どうしようか」

「もー！」

その後、十一時半も過ぎていたので、僕は凜を家まで送った。家族にはバレなかったようだ。僕はコンビニへ寄ってから帰った。雑誌を買う為だ。

翌日、学校の帰りに一人であの神社の、あの女がいた場所へと行ってみた。そこには、釘で打たれたボロボロの藁人形が残っていた。僕はそれを引きちぎり、境内のゴミ箱へ捨てておいた。もうここに来る事も無いだろう。

第二章：真夜中の神社にて・下（後書き）

初めまして。生クリームです。

この度は初の投稿という事でしたが、なかなか難しいですね。

この物語はヤマ無し・オチ無し・イミ無し小説ですが、今後よろしく願います。

第三章：差出人を探せ・上

「ねえ。見てよ、コレ」

放課後。誰もいない2ーCの教室。燃えるゴミを漁っていた桜庭凜が嬉しそうに、燃えないゴミを漁っている僕を呼んだ。

勘違いされない為にも言っておくけど、これは係の仕事だ。僕と凜の2ーCでの社会的地位は『ゴミ係』なのだ。

……多少“個人的思惑”が入っている事は認めるけど。

「何だよ」

真面目に仕事をしていた僕は、多少不真面目に仕事をしている凜に応える。

「ほらコレ。ラブレターを見つけた」

凜の手の中には、本人の述べた通りの物——くしゃくしゃになったピンクのラブレターがあった。

「誰が出したか分かるか？」

はつきり言つて僕は、ラブレターなんぞに興味は無い。それでも一応聞いておいた。

「分からない。差出人の名前、どこにも無いや。それにしても、今時ラブレターかあ。うんうん、風流だね」

「アドレス知らなかったんじゃないかね？」

凜はピンクの紙切れをまだ見ている。やけに楽しそうだ。

「それで？誰宛なんだよ」

僕は、一番大切な事を言わない凜を訝しみつつ、大事な事を質問した。このクラスの中には確実に、アレを貰って、そしてゴミ箱の中へ捨てた人物がいるのだ。男子であれば、からかってやるつもりだった。

凜が口を開く。

「ん」とね。2年C組、斎藤淳くんだった」

何だって?!

一瞬間まった後、思わず僕は吹き出した。C組の斎藤淳。ソイツの正体は――

「俺かよ!」

何を隠そう、この僕自身だ。

「よっ、色男!流石にモテるねえ」

「ちよつと貸せ」

僕はヘラヘラしている凜の手から、ピンクの紙を奪い取った。急いで中身を確認する。

『拝見 21C 斎藤淳くん

私は、入学式であなたを見て以来、ずっとずっと好きでした。今、この気持ちを伝える事が出来て、とても幸せです。

ただ誤解して欲しくないのは、私は別に付き合ってもらいたいなどという、おこがましい考えは無いという事です。それではお元

気で。かしこ』

僕は、頭が痛くなった。僕の読解力では、これを書いた人が何を言いたいのか、さっぱり理解出来なかった。

「何だ、この支離滅裂な文章は。手紙の書き方が全然なってる。会ったら説教してやる」

「それ、突っ込むトコ違う」

僕も堕ちたものだ。凜にまで突っ込まれてしまった。

それにしても、ラブレターを発見してからの凜は、どこかおかしい。普段なら、凜が突っ込むのは、地球のどこかに隕石が堕ちる確率にも等しい。つまりそんな事は有り得ないのだ。何か気になる事でもあるのだろうか。

「ねえ、そのラブレターの差出人を探してみない？」

凜が目を輝かせながら言う。僕もこれを書いた人物と、そしてそれが何故ゴミ箱に入っていたのかが大いに気になる所だ。

「ああ。俺も、ソイツに説教してやらなきゃだしな」

「だから、突っ込むトコ違っつてば」 今確率の上で、地球に二個目の隕石が堕ちた。

第四章：差出人を探せ・下

「このラブレターを出した犯人だが。何か心当たりは無いかね、ワトソンくん」

「誰がワトソンだよ。むしろ俺の方がホームズだと思うけど」

凜は、すっかりやる気を出したようだ。黒板に要点をまとめている。

「……普通二つ折りの手紙って、封筒に入れるよな。どこかに封筒があるんじゃないか？」

凜は、少し驚いたような顔をした。

「……流石ワトソンくん。その通り。じゃあ早速封筒を探してみよう」 僕は、色々と言いたい事があったが、口に出すのはやめておいた。

僕が教室を出ようと振り返ると、凜は黒板消しで自分の書いた文字を消している所だった。

「ねえ、どこから探す？」

放課後の学校内。吹奏楽部の合奏の音や、合唱部の歌声が聞こえる中を、僕は進む。

何人もの人達とすれ違った。僕と同じ、所謂帰宅部というやつだ。

（凜は一応、文芸部である。現在は幽霊部員だけれど）

あの中の誰かが、手紙の差出人かもしれない。

「手紙の方がゴミ箱に捨ててあったなら、封筒の方もゴミ箱にあるんじゃないか？どこのゴミ箱かまでは、分からないけど」

僕が言くと、凜は頷いた。

「じゃあ手分けして探そうよ。私は一棟へ行くから、二棟を頼むね」
それだけ言くと、凜は殆ど駆け出す体勢に入った。

「おい待て。一棟は特別室や何やらしかないだろ。二棟はクラスが全部あるんだぞ。残っているヤツがいるかもしれない中で、ゴミ箱を漁れと?」

僕は思わず叫んでいた。幸い、近くに人はいなかった。

「何言ってるの。探しているのは誰のラブレター?——というわけで、よろしく。後でまたここでね」

「……帰ってもいいですか?」

僕は、去って行く凜の背中に、そっと呟いた。

「ふう。あと三クラスで二年は終了か」

あれから十分掛かって、二年の教室のゴミ箱を五つ調べた。残りの三つというのは、最初に見た時には、まだ残っている生徒がいて調べられなかったのだ。

しかしなぜ僕宛のラブレターが、2-Cのゴミ箱に捨てられているのだろうか。しかも封筒から出た状態で。

僕は、歩きながら考えをまとめてみる。ラブレターを置く場所は下駄箱、と相場が決まっている。あれの差出主が、あのラブレターを2-Cのゴミ箱へ捨てたとは考えにくい。多分あのラブレターも、最初は僕の下駄箱へ入っていたのだろう。

ではなぜそれがゴミ箱に捨てられていたのか。

それは、ラブレターを僕の下駄箱から取り出した人物がいるのだ。そしてその人物は、2-Cの誰かに間違い無い。

ここまで考えると僕は、先程の集合場所へと戻る事にした。恐らく他の教室のゴミ箱には、封筒は無いのだ。

「あつ、すごい!グッドタイミングだね。今呼びに行こうとしてたんだよ」

待ち合わせ場所には、既に凜が来ていた。僕の姿を確認して、走り寄ってくる。

「俺の所には無いだろうと思ったから来た。——あったか？」

僕が尋ねると凧は、勝ち誇った顔でピンクの封筒を取り出した。

「ほらほら、コレ見てよ。昇降口の所のゴミ箱で見つけたんだよ」

僕は、貸せと言って封筒を受け取る。昇降口にあったせいか、手紙の方よりも汚れていた。

「えーと。みどり……かわ……。クソ、かすれているな。緑川遥香って読むのか」

それは、僕の知らない名前だった。しかし、どこかで聞いた事がある気がする。

「俺は知らないな。お前知ってるか？」

僕は凧に尋ねる。凧は少し考え込む様子を見せたが、やがてこう言った。

「私も分かんない。一年生とかかな？」

本当に誰だろう。この名前は、絶対にどこかで見たはずだ。思い出せないのがもどかしかった。

ふと時計を見ると、既に五時をとくに過ぎている。

「今日は帰るか？いつの間にかこんな時間だし」

凧も頷く。

「そうだね。帰ろつか。私、帰ったら友達に緑川さんの事聞いてみる。分かったら教えるね」

「ああ頼む。俺んちにも名簿があつたはずだ。帰ったら調べてみる」
僕達はそのまま昇降口で靴を履き、学校を後にした。

駅で凧と別れた後、僕は鞆から再び手紙を取り出した。字面を目で追う。

女子特有の丸文字。特徴があるわけでは無い。文字から差出人を特定するのは難しいだろう。

その時背後から、声がした。

「おっ、淳じゃん」

「後藤……」

僕に声を掛けたのは、同じクラスの後藤祐介だった。僕とは出身中学が同じで、バスケット部に所属している。

「珍しいな。お前、部活は？」

僕の問いに、後藤は口を指差した。

「歯医者だよ歯医者。まっ、殆どサボリ」

後藤は所謂タラシだ。僕は何か知っているかと思い、緑川遥香の事を聞いてみる事にした。

「なあ、お前さ……」

「そういえば淳、お前ラブレター来てたぜ」

僕は驚いた。何故コイツが知っているのだ。ゴミ箱に入っていたのに。

「何で知ってるんだよ」

「えっ、お前も知ってるのかよ。まあいいや。いやね、朝学校に来て下駄箱開けたら、ラブレターがあっただよ。こういうのはしょっちゅうだからな。封筒はそこらに捨てといた」

「それで？」

「で、教室に入っていざ中身を読み始めたら、宛名が斎藤淳くんじゃないか。頭きて捨てといた」

そう言つて、後藤は笑った。

「お前かよ！ややこしい事しやがって」

これで差出人の事以外の全てが繋がった。僕の推理は、大筋で当たっていたようだ。

僕を手間取らせた手数料として、僕は取り敢えず目の前で笑い続ける男の頭を、一発殴っておいた。

そして次の日の放課後。教室が二人だけになったのを見計らって、僕は凜に近づいた。

「私の方は分からなかったよ。他校の人なんじゃない？」

「俺の方は収穫があった」

僕はなるべく自然に見えるように振る舞う。

「えっ、分かったの？」

凜が聞く。

「最後まで聞けって」

そう言っただけ僕は話し出す。

「まず、何故ラブレターがゴミ箱に捨ててあったかについて。これは簡単だ。昨日帰る途中に、後藤に会った。ラブレターは後藤の下駄箱に入れてあったらしい。つまり緑川さんは――」

ここで僕は、一旦言葉を切る。チラリと凜の方を見た。

「入れる下駄箱を間違えたんだ」

「えっ、うそ。そうなんだ」

凜は何やら納得した様子で、しきりに頷いている。

「それで頭にきた後藤は、ラブレターをゴミ箱に捨てたらしい」

「ふむふむ。それで緑川さんの事は分かったの？」

僕は鞆の中から、全校生徒分の名簿を取り出した。

「俺は夕べ、これを三回見てみた。でも、緑川遥香という生徒はいなかった」

「えっ、じゃあ分からなかったの？」

「だから最後まで聞けよ」

今日の凜はやけに結論を急ぐ。僕は続きを――この話の核心を話し出した。

「でも俺は、緑川遥香という名前に聞き覚えがあった。そして思い出した」

凜は静かに聞いている。ここで僕は、再び鞆の中に手を差し込み、一冊の冊子を取り出した。

「これは去年の文化祭の時に、俺が買った文芸部誌だ。この中の作者の一人に、彼女はいた。そうだよな桜庭。いや、緑川遥香さん？」

僕は凜を見つめる。彼女は突然笑い出した。

「あっちょっ、バレちゃったか。おめでとう。その通りだよ」

僕は、ため息を吐いた。

「お前、バカだろ。何で下駄箱を間違えるんだよ。出席順だから、斎藤は桜庭の真上だろ。何で二つ上に入れるんだ」

凜は苦笑いをした。ばつが悪そうに言う。

「ど、どうでもいいでしょ。それより、何で去年の文芸部誌の事何か覚えているかなあ。反則だよ」

「それは、俺が天才だからだよ、ホームズくん」

侮ってもらっては困る。それでも僕は、全国模試二十七位なのだ。

「じゃあ何で緑川遥香が私のペンネームだって分かったの？」

不思議そうに聞く凜。僕は言った。

「そりゃ分かるさ。勇気と愛とゴミをテーマにしたファンタジー小説なんか書く女子高生は、日本中探したってお前だけだ」

五時を知らせるチャイムが、静かになった教室に響いた。

番外編：理由

彼には祖父がいました。彼の祖父は、いつも帰りの遅い両親に代わって、彼を幼稚園まで迎えに来てくれました。

彼は、自分の祖父が大好きでした。大好きな祖父と手を繋ぎ、一緒に歩く時間を、いつも楽しみにしていました。

「ねえ、おじいちゃん」

彼は隣りを歩く祖父の手を見ながら言いました。まだ彼は小さいので、見上げなければいけません。

「どうした？」

彼の祖父が応えます。

「これからどこに行くの？」

彼は今度は、オレンジ色に染まり始めた空を見ながら言いました。そろそろ彼の母親が帰って来る時間です。帰りが遅くなっては叱られるので、彼は心配そうに言いました。

「今日は公園に行こうと思っているんだが、行きたいか？」

祖父が言いました。

「公園！行く行く」

途端に彼は、はしゃぎ始めます。いつも行く公園も、祖父と一緒にだと未知の世界になるのです。

二人は手を繋いで、歩き始めました。冷たい秋の風が吹いていました。

「あのね、今日はね……」

古ぼけた白いベンチの上で、彼はその日幼稚園であつた出来事を報告します。

彼の祖父は時折、そうかそうかと相槌を打ちながら、楽しそうに聞きました。

「で、ぼくはひろくに言ったの」

その時少し冷たく、少し強い風が吹きました。公園の裸同然の木から、枯れ葉が飛んで行きます。そして、カランカランという音がしました。

「あつ、空き缶」

彼は、風によって転がって来た空き缶を指差しました。

「空き缶は、ゴミ箱にすてないといけないんだよ。ぼく、すてて来る」

「行っておいで」

彼は転がるように駆けて行くと、空き缶を持ってゴミ箱へ捨てました。

「偉かったな」

戻って来た彼を祖父は褒めました。彼は嬉しそうに笑います。

「最近、ゴミをゴミ箱に捨てない人が多いんだ」

彼の祖父は言います。

「お前はこれから、ゴミはきちんとゴミ箱に捨てられるよな？」

祖父の問いに、彼は

「うん。ぼく、ちゃんとすてるよ」

と、誇らしげに言いました。

祖父は立ち上がります。

「そろそろ帰るとしようか。お前の母さんも、帰って来るだろうってその言葉につられるように、彼も立ち上がりました。少し前を行く祖父の手を握ります。

「そっぴいばおじいちゃん。今日はせきをしないね。風邪、なおったの？」

「……ああ。すっかり元気になったぞ」

「良かったね」

彼は、嬉しそうに言いました。

二人は手を繋いで帰ります。日の暮れかけた公園は、誰もいなくなりました。

「おじいちゃん、今日はおそかったね。お仕事？」

次の日の夕方の事です。その日彼の祖父は、いつもより遅い時間に幼稚園に来ました。

「はは、スマンスマン。少し寝ておつてな」

「もお」

そんな会話をしながら、二人は手を繋いで歩き始めました。

いつもなら寄り道をしながら歩く帰り道。今日の祖父は、真っ直ぐに帰ります。

「おじいちゃん。今日はどこにも行かないの？」

彼の問いに、祖父は答えました。

「本当にスマンなあ。今日はおじいちゃんが遅れただろう。いつもより遅いからなあ」

内心は散歩をしたかったのですが、彼は祖父が大好きだったので、分かった

と、従いました。

家に帰って、二人はこたつに入ってテレビを見ました。彼の好きな特撮番組です。

「なあ」

コマーシャルになった時に、彼の祖父が呼びかけました。

「何？おじいちゃん」

目線はテレビに向けたまま、彼が応えます。

「おじいちゃん、間違えてゴミ箱に懐中時計を捨ててしまったんだ。」

ちょっと取って来てくれんか？」

「あの時計？」

彼が祖父の方を見ると、確かに祖父がいつも持っている時計がありません。

「分かった。ぼく、とつてくるよ」

彼は、リビングの方へ駆け出します。

「頼んだぞ」

彼の祖父はそう言うと、静かに笑いました。

「あれ、無いなあ。もえる方のゴミかな？」

彼は独り言を呟きながら、ゴミ箱を漁ります。既にかなりの時間が経っていました。

可燃ゴミの方も漁っている内に、火の気の無いリビングは、とても寒くなりました。彼は祖父に、見つからなかったと言おうと決め、リビングを後にしました。

「おじいちゃん、時計見つからなかった」

彼は、和室の障子を開けながら言いました。特撮番組は既に終わっていました。

「あれ、おじいちゃんねてるの？」

彼の言う通り、彼の祖父はこたつのテーブルにうつ伏せて寝ていました。

「ねえってば。時計、無かったよ」

彼は祖父を揺さぶってみました。反応はありません。

「ぼくもねよ」

仕方なく彼は、テレビを消してこたつに入りました。やがて、彼も寝ました。太陽が沈むにつれ、部屋は徐々に暗くなっていきました。

「……何やっているの？」

彼の母親が彼に言います。

「時計をさがしているんだ。おじいちゃん、すてちゃったんだって見つけたらきつと帰って来るよ」

彼がゴミを漁りながら応えます。彼の母親は、少し逡巡した後、語り出しました。

「……あのね、おじいちゃんは死んだの。おばあちゃんみたいに、もう帰って来ないのよ」

そうです。あの時、彼の祖父は既に死んでいたのです。病名は、幼い彼には分かりませんでした。

「おかあさん何言ってるの。おじいちゃんは帰って来るよ。だからこうしてさがしているんだ」

彼は再び、ゴミ箱に向き合いました。彼の母親は、しばらくその様子を見ていましたが、やがて静かに立ち去りました。

彼はゴミを漁り続けました。懐中時計を見つけたら、祖父は帰って来ると信じ、ずっとずっと漁り続けました――

「ねえ、どうかな？」

ここに来て、僕の怒りはピークに達した。

夏休み中盤。一年で最も暑い時期だ。

僕の今日の予定は、完璧だった筈だ。補習は無いし、七月仲に終わらせたので宿題も無い。正午近くに起きて、クーラーの効いた部屋でテレビとゲームとパソコン。そんな風にダラダラと過ごす予定だった。

しかし、その完璧なプランは一通のメールで、あえなく崩壊してしまった。

凜が僕を図書館へ呼び出したのだ。しかも一番暑い時間帯である午後二時に。

「ねえ、その小説の感想を言ってみて。モデルが誰とかは特に無いけど」

凜が生き生きとした表情で言う。僕は手元の『理由』と銘打たれた原稿用紙を見た。

「感想も何もその前に、こんな理由で俺を呼んだわけ？」

僕は、この上なく不機嫌な表情を作って凜を見つめる。

「そつだよ」

凜は、屈託なく笑った。僕は溜め息を吐く。

「モデルが誰とかは聞かないけど……。何だよこれ。もちつとマシなの書け」

僕のコメントに、凜は不服そうな表情をした。

「ええ、結構自信作なのに」

僕の機嫌は最悪だったので、その表情すらも癪に障る。

「あと一つ言っておく。俺のじいちゃん、二人共生きているから」

「……。じゃあ文中の”祖父”を”祖母”に変換して、もう一度最初から……」

「読まねえっつーの！」

クーラーの効いた図書館に、僕の声が響き渡った。

番外編：理由（後書き）

こんにちは。只今夜中ですが、作者の生クリームです。こんな所まで読んで下さって、ありがとうございます。

今回は初の番外編です。生クリームは張り切りました。楽しんで頂けると幸いです。

それではまた。（評価を下されば嬉しいです）

第五章：勝負！

「あっちゃーん」

静寂な空間を破るように、大きな声が壁に反響する。

僕は読んでいた推理小説を閉じ、思わず辺りを見回した。

放課後の2ーCの教室。先程の声を発したのは凜だ。誰か、そこらの人でも呼んだのだろう。そう結論付けた僕は、あえて気にせず、本を開く。

すると、

「ねえ、あっちゃんてば。聞いている？」

凜が目の前にいた。

「一つ聞く。それは俺に言ったのか？」

僕は本を再び閉じて、凜を半眼で睨む。彼女は、さも当然という様子で言った。

「そうだよ。淳だからあっちゃ……」

「却下」

僕は、凜がその言葉を言い終える前に遮った。

「そもそも、何で今更呼ぶわけ？」

僕の問いに、凜は笑いながら答えた。

「昨日ふと思ったの。そういえば私、あっちゃんの名前を呼んだ事無かったよね。何か呼びやすい愛称みたいなのは無いかなって。それであっち……」

「却下。絶対に却下」僕は、取り付く島を与えずに反論する。高

校生にもなつてあっちゃんだなんて、末代までの恥だ。

「何でよ」。呼びやすくていいじゃない。それに、”あつし”って名前の人は”あっちゃん”って呼ばれるって、昔から決まっている

んだよ」

凜は頬を膨らませ、さも怒っているような表情を作った。僕も、芝居がかった口調で反論する。

「あれは、小学校一年の時だ。当時俺には好きな子がいたんだ。まゆみって名前の可愛い子」

「ふむふむ」

勿論これは嘘だ。しかし凜は信じるだろう。

僕は一息ついて、次の言葉を考える。

「で、ある時。俺とその子の席が、隣同士になったんだよ」

「ふむふむ」

「俺は、ラッキーと思って、その子に話し掛けた。で、すぐに仲良くなつて俺は、あっちゃんって呼んでもらった」

「ふむふむ」

僕は、また一息入れる。即興で話を考えるのも、なかなか大変だ。「それからしばらくして、その子は転校したんだな。最後に『あっちゃん、バイバイ』って言うてさ」

「ふむふむ。で、オチは？」

僕は凜を軽く睨み付け、少し考えてから言った。

「分かる？　俺は思い出を大切にしたいんだよ。あの子が最後に言ったあっちゃんっていうのは、特別なわけ」

我ながら、メチャクチャだけど感動する話だ。僕は勝ち誇って凜をみると、彼女は事も無げに言った。

「ははっ。残念だったね。でもそれ、嘘でしょ」

どうやら彼女には通じなかったようだ。僕渾身の作り話は、あっさりと看板されてしまった。

「……まあ、兎に角。絶対に呼ばせないからな。絶・対だ」

僕は、「絶対」の部分を強調して言った。

凜は先程から黙っている。何かを考えているようだ。ようやく諦めてくれたのかと思って、僕は読んでいた本の栞を開いた。

「分かった。こうなったら勝負をしよう！」

「は？」

三行程読んだところで、凧はいきなり言った。

「勝負？ 何の？」

僕は凧の意図が掴めずに聞き返す。せつかく開いた本は、勿体無いけど閉じておいた。

「ゴミ漁り勝負。私が勝てば、あっちゃんって呼ぶね。負けたら言わない」

凧は僕に人差し指を向け、声高に言い放った。

「付き合ってらんねえよ。俺は忙しいんだ。この本を今日中に読み終わらないと、督促状が来る」

僕はそう言っ、また本を開いた。だいたいその勝負は、僕が勝ったとしても一銭の得にもならない。

「……今日は木曜日なんですけど。明日は燃えるゴミの日なんですけど。ゴミ漁りの方はどうするの？」

凧が恨めしそうに言った。

「俺、今日はパス。行きたければ、桜庭が一人で行けよ」

僕は、本から目を離さずに言った。すると凧は、更に恨めしそうな声を出す。

「最近はとても物騒なんだよ。私に夜、一人で出歩けって言つの？」僕が黙っているのを良いことに、凧は尚も続ける。

「もお、約束破らないでよ。良心は痛まないの？」

凧の五月蠅さに集中出来ず、僕はとうとう言った。

「あゝもう、ウゼえ。分かったよ、行ってやるよ。勝負もしてやるから、取り敢えず黙れ」

僕が言うと、凜は一気にさっきまでの表情をかなぐり捨て、やったーと喜んだ。こういう時に妥協するのは僕なのだ。

「でね、勝負っていうのは……」

大分オレンジ付いた教室。凜が勝負の方法とやらを説明する。その方法とは、事前にお題を書いた紙を各々で準備し、相手に渡すらしい。そして合図と共に、自分のお題と相手のお題をゴミの中から探し、両方を見つける。先にスタート地点へと戻った方が勝ち、というルールだった。

「但し、範囲は今日行く隅田町の四丁目で、自分のお題を予め持っておくのは無しね」

そう言つて凜は締め括った。

「するかよ。お前みたいになセコい事はしないから」

僕はそう言うと、読みかけの推理小説をリュックにしまった。既に教室で読むのは諦めている。

「何それ」。私がいつセコい事したの」

「ラブレター」

「あつ……。まあ、それはその……」

帰る準備をし終えた僕は、口ごもっている凜を残して帰る事にした。

「あれ、帰っちゃうの?」

「ああ。早く帰つてこの本を読まないといけないし——じゃあな。今夜は遅れるなよ」

僕はそれだけ言うと、教室を出た。

第六章：決着！

夜十時三分。僕は待ち合わせ場所の近くのコンビニにいた。例によつて週刊雑誌を手にとって読んでいる。

火曜日と木曜日のこの時間帯、僕はこのコンビニの常連客と化していた。店員さんの顔も覚えた。それもこれも全ては凜のせいだ。しばらく雑誌を読んでいると、（実は火曜日にも読んだので、これで二回目だ）コンビニのドアが開く。

「お待ちせ」

凜が来た。一直線に雑誌コーナーへとやって来るといふ事は、僕がいつもそこにいるというわけで、つまり彼女の遅刻の歴史を物語っていた。

「十時五分。いつもより早く来たという事を、俺は褒めるべきか？」雑誌を閉じながら僕が聞く。凜は、ちっとも悪びれずに言った。

「まあまあ、ヒーローは遅れて登場するって言うでしょ？今日は絶対に買つて、何としてもあつちゃ……」

「行くぞ」

凜は僕が話を聞いていない事に少し機嫌を悪くしたようだが、素直について来た。

僕はコンビニのドアを押し開ける。途端に夏の夜の、ムワツとした空気が押し寄せてきた。

「紙、持つて来た？」

現場に到着して開口一番に凜が言う。

「ああ」

僕は返事をしながら、ポケットから小さな紙を取り出した。凜も似たような紙を取り出し、僕たちは互いに交換する。

「ルールはちゃんと分かっているよね、あっちゃ——」

「黙れ」

「……」

全く。油断も隙もない奴だ。

「まあ、とにかく。自分のお題と相手のお題の両方を先に見つけたら勝ちだよ。そうしたら携帯でもう一方に連絡ね」

「分かってる。じゃあ始めるぞ」

こうして、勝負の火蓋は切って落とされた。もちろん負けるつもりは毛頭ない。誰にだって譲れないものはある。負けたら僕は“あつちゃん”になってしまうのだ。

「付いて来ないでね」

「誰が行くか！」

走り去る凜の背中に、僕は近所迷惑にならない程度に吐き捨てた。

さて、凜のお題は何だろう。因みに僕のお題は見つけやすさ重視で鉛筆だ。どうせ凜の事、とんでもないお題を出してくるに違いないと思ったから。

僕は携帯電話を開き、ディスプレイから漏れる光で文字を確認した。

「……」

そして絶句した。

「……。何だよ、コレ」

——やられた。

そこに書いてあった文字。それは——。

“魔法少女 プリキュウ”

「んなもん知るかー！」 夜の町に、僕の雄叫びがこだました。

閑話休題。

取り敢えず、僕は鉛筆だけでも探す事にした。プリキュウは後回しだ。

果たして、鉛筆はすぐに見つかった。短くて汚いピンク色の鉛筆。僕の美学に反するから、いつもなら絶対に拾わないであろう一品だ。僕はプリキュワ探しに取り掛かる。名前からして、恐らくアニメの何かなのだろう。そこから先は全く想像がつかないけど。

魔法少女。アレだ。女の子が魔法の杖を振り回して変身し、お供の生き物と世界の平和を守るヤツだ。あいにく、僕には姉も妹もないからこのジャンルは弱い。

ダメだ。時間だけが過ぎてゆく。

その時、ポケットに入っていた携帯電話が、ブーンと振動した。差出人は凜。

——スタート地点まで来て——

とうとう恐れていた事が起こってしまった。僕はこの場から逃げ出してしまいたかったけど、諦めてスタート地点へ向かった。

「えへっ」

既に凜はスタート地点にいた。その、いかにもしてやったり、という表情がムカムカする。

「どうやら勝負は付いたみたいだね」

「証拠を見せる」

僕は、わざとトゲトゲしく言う。

「ほら、見て見てコレ。まさにお題にぴったりじゃない？」

そう言っただけで彼女が差し出したのは、一本の鉛筆。ただし全体はピンクがかった、“魔法少女 プリキュワ”の文字と、杖を構える女の子の絵がプリントしてある。

「あっちゃん、もしかしてプリキュワ知らなかった？ 今、ちっちゃい子たちの間で流行ってるんだよ」

「……っと待て」

「ん？」

「ちよっと待て」

僕はポケットから、先ほど拾った鉛筆を取り出した。

「この鉛筆なら、俺もさつき拾った。これで勝負は引き分けだ」
すると、凜が僕の手から汚いプリキュワ鉛筆を取り上げる。

「ダメだよ。あっちゃんの鉛筆は短すぎるから分かんない。現にあっちゃん、これがプリキュワって事判別出来なかったんでしょ？」

「くっ……」

正論だ。凜は、小悪魔みたいに意地悪く、にっこりと笑った。

「今日からよろしくね、あっちゃん」

「ちつくしゅあー！」

本日二回目。夜の町に、僕の雄叫びがこだました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1402b/>

はんたあ

2011年1月22日14時37分発行